

詩の中の月

構造主義から見る日本近代詩

馬 可遥 (経済学部 4 年)

指導教員：山本武男

要旨

本稿は、構造主義的な視点から詩を分析することを目的とする。従来、詩の分析は、作者の心情や、同時代での比較が中心であったので、時代、文化、言語を超えて詩そのものを比較・分析したいと考えた。そこで、新しく構造主義的な分析手法をつくり、それによって日本近代詩を腑分けした。よって、本稿の主要な要素は2つあり、手法の構築とその実践にある。

今回は時代、文化、言語を超越するテーマとして、月を設定した。月の登場する詩を収集し、対立する2つずつ3組の概念を座標軸X, Y, Zに置き、その頂点をつなげて8面体の構造体をつくる。すなわち、対象となる詩の中で月について、①主役的であるか、脇役的であるか。②集中証明（スポットライト）的であるか、全体照明的であるか。③作者的であるか、読者的であるか。の3組の概念で比較するのである。こうして作った構造体の中に、ベクトルとして詩を入れていき、詩人ごとの傾向を比較、分析していく。今回は日本近代詩という比較的分析を行いやすい分野を対象を絞り、北原白秋（62 篇）堀口大学（31 篇）三好達治（24 篇）萩原朔太郎（17 篇）中原中也（8 篇）室生犀星（8 篇）島崎藤村（5 篇）高村光太郎（8 篇）丸山薫（0 篇）という9人の詩人をピックアップして分析を行った。

さて、詩人それぞれに敵を扱う詩の数が全く違っていた。一番多かったのは北原白秋で50篇を超えたが、丸山薫にはほとんどなかった。次に月の存在感が強いグループと弱いグループに分けることができた。これらから得られた結果は、月をよくテーマにする詩人は月の存在感がいつもあるわけではなく、あまりテーマにしない詩人の月は強い存在感を示す。

本稿各章の流れは次のとおりである。序においては本稿全体のテーマや目的について記した。第一章では具体的な分析方法を構築し、第二章から実際に9人の詩人を分析した。第三章で全体についてまと

め、考察した。終章では、今後の課題について述べた。また、付録には詩の判断基準表と今回考察に使用した詩のリストを付けた。